

## 自動車防災情報

## 奪ってしまった幸せ

(財)東京交通安全協会(令和6年)  
「贖いの日々」(第59集)より  
M・T会社員(50代)

私は新聞やテレビ、ネットニュースなどで、幼い子供が犠牲になる交通事故を見たり、聞いたりするたびに、ご家族はさぞかし辛いことだろうと心を痛めていました。しかし、まさか自分が加害者となり、人生を始めたばかりの幼い命を奪い、ご遺族に苦しみ、悲しみを与えるとは思ってもみませんでした。

私は職業ドライバーとして、車の運転には人一倍気を遣っていました。その私が「まさか」事故を起こすとは、悪夢が現実となりました。早いもので事故を起こしてから2年半の月日が経ちます。しかし事故のことは、昨日のこのように鮮明に覚えています。思い出すことは非常に苦痛ではありますが、私にとって絶対に忘れられない、いえ、一生忘れてはならない事故なのです。

その日私は、繁華街から別の繁華街へ向けて大型車両を運転していました。このルートにある繁華街には、駐車車両のほか歩行者や自転車の通行も多く、交差点では右左折の多い通りです。しかし、このルートには僅かな距離ですが道幅が広く、交通量の少ない区間もあります。そのため、私はいつもその区間を通過する時だけは、安心感から注意力を一段下げて運転していました。

しかし会社からは、その区間にある交差点は、歩行者が多いので左折時のみならず右折する際にも徐行して、歩行者がいる場合は必ず横断歩道の手前で一時停止するよう指導されていました。さらに、その交差点を右折した先にある横断歩道には、直近に高さ1メートルほどの植え込みがあり、それが死角となって、横断してくる歩行者が見えづらいので十分注意するようにも指導を受けていました。

しかし私は、休日で交通量が少ないことから、「今日は道も空いているし、この区間は大丈夫」と安易に考えていました。そして、交差点を右折して、前方の横断歩道を見ると、左側から自転車に乗った子供と、それを押す父親らしい姿が見えました。私は一時停止をせず、徐行運転で親子が通過するのを見送ると、左右の安全確認を怠り横断歩道を通過してしまいました。すると、小さく「ドン、ドン」と何かを踏む音が聞こえたので、左ミラーで確認すると、横断歩道に人が倒れているのが見えました。

私はすぐに車から降りると、倒れている被害者のもとに向かいました。被害者は遠方から見ても損傷が激しく、一見して亡くなっていることが分かりました。その時、たまたま付近をパトロールしていた警察官の姿が見えたので、大声で呼び、状況を説明した後、逮捕されました。

両親と思われる方が現場で絶叫し、泣き崩れている姿が今も忘れられません。後で分かったことですが、自転車に乗っていた子供と亡くなった被害者とは兄弟で、先に横断歩道を渡った弟と父親を追いかけ横断歩道を渡っていたのです。私は植え込みが死角となって、亡くなられたお子さんを全く見ていませんでした。事故原因は明らかに横断歩道の手前で一時停止を怠った私の責任です。私の「歩行者はいないだろう」という思い込みによる漫然運転が、横断歩道での安全不確認に繋がり、取り返しのつかない重大事件を招いたのです。

留置場から釈放された後、「謝罪したい」と弁護士を通じ、ご遺族へお願いしましたが、「まだ謝罪を受け入れる精神状態にない」と断られ、示談を含め拒否されました。職場は、会社や同僚に多大なご迷惑をかけたけじめとして、自主退職しました。その後、刑事裁判が始まり、私は過失運転致死罪で1年4ヶ月の判決を言い渡されました。裁判の中で、幸せな生活を送っていた被害者の家族は、事件後生活が一変し、PTSD(心的ストレス障害)を発症したため、日常生活も困難な状況であることを知りました。私の不注意から、奪ってしまったものがあまりに大きいことに衝撃を受けました。

私は今、市原刑務所で規則正しい受刑生活を送りながら遵法精神を学び、ご遺族の心情の理解に努め、自分の犯した罪と真摯に向き合っています。この手記を読まれた方は「他人の幸せを奪う」ということがどういうことか、今一度考えてみて下さい。

そして、私のような加害者や、将来を奪われる被害者が無くなることを心から願っています。